
闇の石

田中伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の石

【Zコード】

N8728C

【作者名】

田中伊織

【あらすじ】

河口真が拾った、不思議な魅力を持つ石。でも、その石は実は…?

第一話 石

「なんだ、これ」

足元に落ちているものを拾い上げる。

「うつ！？」

それは、見た目以上の重量をもつていた。

ビー玉ほどの大さの、深紅の綺麗な石。

そんな石が、鉛のような、いや鉛以上の重さだったのだ。完全な球体をしているので、天然のものではなさそうだ。しかし、人工のものというには、あまりにも神秘的だった。装飾を目的とした宝石ならば、光を反射させ、キラキラと輝かせるためにカットがなされているはずだ。

それなのにこの石は、つるんとした球体。

色が濃いためか、中心部は暗いもやがかかつたようで、光を通さない。

太陽にかざしても明るさをまるで感じないその漆黒の闇には、吸い込まれるようだ。

ただの石とは思えない。

その謎めいた魅力に、俺は抗うことことができなかつた。

俺は憑かれたようにそれをポケットに突っ込み、家路を急いだ。

家に着くと、着替えもせずに石を取り出し、眺めた。

……今の俺、普通じゃないな。

しかし、わかつていてもやめられなかつた。

俺はこの石に魅せられてしまつていて。

漆黒を湛えた深紅の暗闇に、俺の意識は溺れそうだつた。

「……」

どこかで声がする。

「…………まことつー！」

誰かが俺を呼んでいたようだ。

しかし、両親共働きのこの家に、こんな口中にいるやつとこつたら決まつている。

確か、俺のことは『お兄ちゃん』と呼んでいたはずだが。

「真あつ……」

ばたんっ

ドアが勢い良く開いた。

そこには、鬼の形相でこちらを睨む可愛い我が妹、 麻由がいた。

「よう麻由、 どした？」

「私のプリン勝手に食べたな―――っ――」

そう叫びながら駆け寄ると、俺から数歩の距離で軽やかに飛び、

「天誅つ――」

「げふつ

……見事な蹴りを繰り出した。

前言撤回。

ぜんぜん可愛いない。

「み、ミニスカートで、飛び蹴りを、するな……がく」
薄れゆく意識の中、俺は兄として最低限の役目を果たした。

「…………え？ わわっ、ごめんお兄ちゃん、大丈夫！ ？ ちょっと！ ？」
予想以上のダメージを『えてしまつたことに驚いたよつな声を、ブ
ラックアウトしていく頭でぼんやり聞いていた……

「やつすきました、『めんなさ』……」

わづきまでの勢いはどこへやら、 麻由はしゅんと小さくなっている。
「でも、元はと言えばお兄ちゃんが悪いんだよ？ 私のプリン、 勝手
に食べちゃうから……」

口を尖らせて、 いじけたように頬を膨らませる。

「言つておぐが、俺には身に覚えがないぞ」

「ええつ！ ？ そななの！ ？」

麻由は驚いた顔をして、すぐに気まずそうに視線を逸らした。

「…………ほんとに、」「めんなれこ」

泣きそうな声でそう言い、深々と頭を下げてくる。

「いじょ、そんなに怒つてるわけじゃないし」

その頭をくしゃくしゃと撫でてやる。

「あ……」

麻由は恥ずかしさうに視線を落とし、

「ありがと、お兄ちゃん……」

小さな声で、やつぱり言つた。

「…………あれ？」

しばらく撫でてやつていると、麻由が唐突に声を上げた。

「お兄ちゃん、これ、なに？」

麻由が足元にあるものを拾い上げる。

例の石だった。

飛び蹴りをくらつたときにも転がったのだろう。

まじまじと石を見つめていた麻由は、突然、恐怖に全身を硬直させた。

「…………あ…………い、嫌…………」

「麻由、どうした？ 麻由っ」

麻由は、思わず落としてしまった石から逃げるよつてあとずさつた。

「…………嫌あ…………怖いよ…………お兄ちゃん…………」

「麻由っ、しつかりしろー！ 麻由っ！」

麻由の両肩をつかみ、がくがくと揺さぶる。

俺にはわけがわからなかつた。

わかるのは、石を見てから麻由は恐怖に怯え始めたところだけ

……

「くわっ」

石を遠くに蹴飛ばす。

先程まで魅力に満ち溢れていた美しい石は、今や忌々しい呪いの石に見えた。

「…………う…………あ…………」

麻由は顔面蒼白で、全身をがたがたと震わせながら、石を見つめ続けていた。

「麻由、少し休め」

そう言って、石から麻由を庇つよじて部屋から連れ出そうとしたときだった。

「ダメえええええええつ！！」

麻由が絶叫し、俺に抱きついたかと思つと、回り込んで石から俺を庇つようとした。

「きやあああああつ！」

……俺は田を疑つた。

部屋の隅に転がった石から、赤黒いガスの塊のような、禍々しいものが吹き出し、麻由の背中を直撃したのだ。いや、直撃したといつより、麻由の体に染み込んだと言つた方が正しいかもしれない。

麻由は気を失つたのか、ぐつたりと倒れこんできた。

「…………麻由…………？」

返事はない。

それどころか、反応すら見せない。

「麻由」

自分の鼓動が早くなつていいくのがわかる。

「麻由つ、しつかりしろつて！ 麻由つ！」

がくがくと揺さぶつた。

何も考えられなかつた。

麻由が目を開けないことが信じられなかつた。

「麻由つーおい、麻由つー」

「つ……」

麻由がかすかに身じろぎし、ゆづくつと田を開き始めた。

「麻由」

俺は胸をなでおろした。

が、次の瞬間、麻由と田が合つた俺は呆然とした。

瞳が……紅い！？

深いブラウンだったはずの麻由の瞳は、あの口のよつこ、漆黒の闇を湛えた深紅だった。

……違う、これは麻由じゃない。

本能的にそう感じた。

麻由に入り込んだそいつは、口の端をかすかに舐めると、俺に抱きつき、首筋にキスをした。

「痛っ、いたたたたつ！」

……いや、キスではなかつた。

噛み付いている。

「このつ……！」

なんとか振り切り、そいつと距離をとる。

噛まれたところに手を触れるが、幸い血は出でていないようだ。

麻由が、ニヤリと笑う。

鋭い犬歯が露になる。

背筋をぞくりと恐怖が伝つた。

体は麻由のものだ。

傷つけることはできない。

……どうすればいい？

そのとき。

麻由は急に動きを止め、床に崩れた。

「麻由ー」

思わず駆け寄る。

「う……お兄……ちゃん？」

「麻由つ……」

開かれた麻由の瞳は、いつもと同じ、深いブラウンだった……

落ち着かせるために、紅茶をいれてやつた。

ストレートに、はちみつをスプーン2杯とちょっとを入れ、かきまぜる。

なぜか麻由は昔から、はちみつは『2杯とちゅう』といつこだわりがあるのだ。

それに口をつけ、麻由が尋ねた。

「何か……あつたの？」

「……」

正直に話すべきか、迷った。

さつきの麻由は、何かに乗り移られていくようだった。

しかもその『何か』は、俺が拾ってきた怪しげな石から飛び出してきたのだ。

……そういえば、あのあと麻由から出でていった記憶がない。

まだ麻由の中にいるのだろうか。

いずれにせよ、正直に話せば麻由は俺に罪悪感を感じるだろう。

それは避けたかった。

原因を作ったのは俺なのに、麻由は何も悪いことをしていいのに、自責の念にかられるのはあまりに可哀想だ。

「いや……何もないよ。麻由が急に氣を失って倒れたからびっくりしたぞ」

「……首、どうしたの？」

「えつ？」

納得した様子のない麻由の次の質問に、俺は凍り付いた。

何もなかつたら首筋に歯形のあざなんてつくはずないでしょ？

そう言われているような気がした。

「……」

麻由は両手でティーカップを持ち、その水面をじっと眺めていた。

麻由は、もしかしたら、さつきのことを覚えているのかもしない。

質問は、信じがたいことを確信に変えるためだつたのかもしない。

「……麻……」

「私、晩ご飯の準備するね」

俺の呼び掛けをさえぎるように明るい声で言い、麻由はキッチンに

入つていった。

「なんなんだよ、一体……」

俺はあの石を拾つたことを後悔していた。

とんでもないものを拾つてしまつたのかもしれない……

第一話 石（後書き）

お読みくださいありがとうございました。よろしければ連載終了まで
お付き合いいただけると幸いです。また、感想等もお待ちしていま
す。

第一話 河口麻由

ちやっぷ

湯船に同心円状の波紋が広がっていく。

「ふつ……暖かい」

さつき、私が食事を作ってこるときの、お兄ちゃんの態度。何かを聞きたそうだった。

でも、ちょうどいことこのことお父さんもお母さんも帰ってきたので、結局聞けなかつたようだつた。

お兄ちゃんはあつと気づいている。

お兄ちゃんに囁み付いたとき、私の意識があつたこと。

……そう、私はお兄ちゃんに囁み付いたんだ。

あの石を見たとき、私はとつても怖かった。

よくはわからないけど、何か恐ろしいものが近づいてくるのを感じた。

まるで、獲物を追い詰める捕食者のような、何か。

目の前にいたはずのお兄ちゃんの姿が見えなくて、どうすればいいのか全然わからなくなつた。

「コノ、愚力ナ男ノ体ヲ、戴クトシヨウ」

そんな声が聞こえた。

地獄の底から聞こえてくるような、禍々しい声。

途端に、現実に引き戻されたような感覚があり、お兄ちゃんは目の前にいた。

お兄ちゃんに危険が迫つてゐる。

そう思つたら無我夢中で、自分でも何をしているのかわからなかつた。

次の瞬間、背中に殴られたような衝撃。

そして、金縛りにあつたように体が動かせなくなつた。

「…………」

お兄ちゃんが私を呼んだ。

早く安心させてあげなきや。

そう思つたのに、体がいうことをきかない。

目を開けようと思つと開かないくせに、今度は開けようと思つていいのに目が開いていく。

まるで、自分の体ではないみたいだ。

お兄ちゃんは一瞬安心したような顔をしたあと、驚いたように目を見開いた。

そして私は、お兄ちゃんに……

そのあとのことは、あまり思い出したくない。

好きな人を、世界で一番大切だと思っている人を、傷つけた。

私はお兄ちゃんのことが好きだ。

叶わぬ恋だつてことは、わかっている。

血の繋がりがないとはいえ、兄妹には違いないから。

確かに、好きな人と両想いになれないのは哀しい。

でも、例え願つた形で愛されなくとも、お兄ちゃんは私を妹として愛してくれている。

好きな人の妹になる、と決まったときに覚悟したことだから。

私には、それだけで十分なんだ……

河口兄妹は仲がいい、と近所で評判になるくらいなんだから。

「本当二、ソウカ？」

「えつ」

頭の中に響く、禍々しい声。

この声は、あのときの……！

「心ノ奥底デハ、アノ男ノ心ヲ欲シテイルヨウダゾ？」

「そ、そんなことないっ！」

お風呂に響く私の声。

「クク、我ニ嘘ヲツクコトハデキナイノダゾ？我ハオマエ、オマエ

ハ我ナノダカラ」

「私は私っ！お前なんかとは違うっ！」

頭の中で、危険信号が点滅している。
脳の芯が痺れるような感覚がある。

「のままでは、また……

「クク、安心シロ。ソノ想イ、我ガ叶エテヤロウ」「……え？」

叶づ？

叶わないと諦めていた、この想いが……？
お兄ちゃんど、両想いになれるの……？
思わず心が揺れてしまった。

「うつー？」

その瞬間、心が呑まれ、体の感覚がなくなつていぐ。

だめ……

また、お兄ちゃんを……
体がいつことをきかない。

手足が勝手に動く。

私の体は湯船から出ると水滴も拭かずにお風呂場を出て、服も着ないで脱衣所をあとにした。

がちゃ

「ん？」

お兄ちゃんの部屋のドアを、ノックもせずに開ける。
お兄ちゃんは驚いた顔をしている。

それはそうだ。

妹が、裸で立つていてるのだから。

「ま、麻由つ、なんて格好でつ……ととにかく服を着なさい」

狼狽するお兄ちゃんの胸に飛び込む。

「ま、麻由……？」

私は牙をむいてお兄ちゃんの首筋に……

いけない！

「お兄ちゃん逃げてえええええええつー！」

私は力の限り絶叫し、力の入らない腕でお兄ちゃんの胸を押す。

お兄ちゃんの体は2・3歩後ろへさがり、私の牙は空を切った。

お兄ちゃんと目が合ひ、対峙する。

お兄ちゃんに、警戒……それでいる。

「ク、今日ハモウ無理ソウダナ……」

頭の中で声がした。

その瞬間、膝ががくんと崩れた。

「麻由つ、大丈夫かつ！？」

お兄ちゃんが慌てて駆け寄る。

私は、また、お兄ちゃんに……

「う……つ、……つ……ひへ……ひへく……ひええつ……つ……

悲しかった。

どうして私が、お兄ちゃんを傷つけるのだろ？。

嗚咽が漏れる。

「麻由……辛かつたな」

お兄ちゃんが私を優しく抱きしめ、頭を撫でてくれる。

「ひぐ……つ……う……お、にい……つ、ちゃん……」

私はお兄ちゃんの胸にしがみつき、泣いた。

ばたんつ

「どうしたつー？」

「あ……」

お父さんとお母さんがドアを開け、呆然とした。

……どう思ったのだろう。

髪からつま先までびしょ濡れの娘が、息子の胸にしがみついて泣いている。

しかも裸。

しばらくの間、まるで時が止まつたかのように、誰も動かなかつた

……

あのあと大騒ぎになり、お兄ちゃんと私はお父さんとお母さんに説

明するのが大変だった。

なんとなく、石のことは隠した方がいいような気がして、嘘をついてしまった。

でも、事故だつた、と説明しようと、「何がどうなつたらあんな事故になるのか」なんて考え方がない。

結局、「私がお風呂で眠つてしまつてお兄ちゃんが死ぬ夢を見たので、怖くなつてお兄ちゃんに抱きついて泣いていた」と説明した。

……ちよつと、いや、かなり苦しいけど。

二人はあまり納得したようには見えなかつたけど、追及しても無駄だと思つたのか、戻つていつた。

「「めんね、お兄ちゃん……」

あんな場面を見られたことは置いといたとしても、また噛み付こうとしてしまつた。

お兄ちゃんは何も言わずに、私の頭を優しくぽんぽんつと叩いた。

「麻由、しばらく学校休め」

「……え？」

お兄ちゃんの考へてることとはわかる。

このままでは私は、周りの人間に危害を加えてしまつかもしれないのだから。

「……お母さんたちにはなんて言うの？」

「俺が適当に「まかしとくから大丈夫」

「……わかつた」

それにしたつて、あまり長い間休めば不審に思われてしまう。

この問題は、短期間で解決しなければならないのだ。

「……麻由、絶対に俺がなんとかしてやるからな」

それでもお兄ちゃんは、頼りになる笑顔を私に向けた。

第三話 藤原すみれ

キーンコーンカーンコーン

午前最後の授業が終わった。

待ちわびた昼休み。

俺は、一人のクラスメートの席へ向かった。

藤原すみれ。

容姿は文句なしの美少女なのだが、暗くて近寄りがたい雰囲気を持つている。

そんな彼女が、一人静かに本を読んでいるととても絵になる。

……例えその本が「黒魔術のすべて」というタイトルで、本を読みながら何かをぶつぶつと唱えていたとしても、だ。

彼女はいわゆるオカルトマニアってやつだ。

しかも、いつも一人で過ごし、他人に話しかけられたりするのを嫌がっているようにさえ見える。

学年中に名の知れた、変人の中の変人。

正直言つてあまり話しかけたくない相手だ。

だが、麻由に起こった異常な状況を考えると、一番頼りになる人物かもしねりない。

俺は、藁をもつかむ思いで彼女に相談することにした。

「や、やあ」

間抜けな挨拶をしてしまった。

彼女は怪訝そうな顔をこちらに向かた。

いや、不機嫌そうと言つたほうが正しいかもしねりない。

「……誰？」

同じクラスなのに、名前も覚えられていないのか。
少し切なくなつた。

「俺、河口真つていうんだ。ちょっと相談したいことがあるんだけど、昼飯でも一緒にどうかな？」

なんだかナンパでもしているような気分だ。

「どうして私があなたの相談に乗つてあげなければならないのかしら？」

「ほかに頼れる人がいないんだ。頼むつ」

頭を下げる。

クラス中の視線が集まっているのを感じる。

彼女に話しかけると、クラスの注目を浴びることになるのだ。

そして、変人に頭を下げている俺。

明日から、少なくとも数日は俺も変人として扱われることになるだろう。

しかし、そんなことは覚悟の上だ。

彼女に断られる可能性は、95%を越えると思われる。

5%に満たない彼女の気まぐれが、麻由を助ける望みなのだ。

……なかなか返事が来ない。

これは、断られるかな。

そう思つたときだった。

「……いいわ、聞いてあげる」

意外な答えが返つてきた。

「ほ、ほんとか！？」

「嘘を言つても仕方ないでしょつ。ただし、手短にお願い」

「あ、ありがとう！」

「ふうん、この石から……」

興味深そうに石を眺める。

屋上でパンをかじりながら、すべて話した。

最初は興味なさそうに聞いていた彼女も、内容が内容だけに、途中からはかなり真剣に聞いてくれた。

「何か、いい方法知らないかな？」

「いい方法、というのは、妹さんとその化け物を分離する方法、と
いうことかしら？」

俺は「いくつと頷く。

「……こんな話、聞いたことないからそんなのは知らないわ」

「……やつぱ、やうだよなあ

「俺はがつくりとうなだれた。

これで、問題を根本から解決する手段は事実上なくなつたといえる。「でも面白そудから、協力してあげる。妹さんに会わせてくれる？」

そう言つて食べかけのパンを袋にしまい、彼女は立ち上がりつた。

「お、おい、まだ時間あるぞ？それ食べてからでもいいんじゃない
か？」

「妹さんに会うのは少しでも早い方がいいわ

「く？」

まさか、これから会いに行くつづこうじや……

「家まで案内して」

……午後の授業、サボるんですね、藤原さん。

「こんこん

「はーい？」

「俺」

「え！？お兄ちゃん！？」

麻由がドアを開ける。

「こんな時間にどうしたの？学校は？」

「サボった」

「ええつ！？」

麻由が驚いた顔をしている。

……俺だつて驚いている。

「こんなにちは」

俺のうしろから、藤原さんが麻由に挨拶する。

「あ、こんにちは」

「あなたが麻由さんね？」

「はい、そうですけど……？」

麻由が、誰?とばかりに俺を見る。

「えーと、俺のクラスメートの……」

「藤原すみれよ。よろしく」

「河口麻由です。よろしくお願ひします」

「藤原さんはオカルトとか詳しいから、何かわかるかもしねないと
思つて相談したんだ」

「あ、なんだ」

麻由が納得したように言つ。

「オカルト、とは心外ね。私は他人よりも少しだけ魔術というもの
に理解があるだけだわ」

そういうのをひつくるめてオカルトと呼ぶのでは?

「とにかく、現状を把握する必要があるわ。麻由さん、化け物のこ
と、話してもうえるかしら」

「はい……」

麻由は、自分に起つたことをぽつりぽつりと語り始めた。

「最初に石を見たとき、変な声が聞こえてきて……」

よくわからない、恐ろしい何かが近づいてきたこと。

殴られたような衝撃のあと、自分の体が動かせなくなつたこと。

衝動的に、俺の首筋に噛み付いたこと。

お風呂場で、再び「声」が聞こえ、「想いを叶えてやる」と言われ
たこと。

俺を守るために、必死に抵抗し、なんとか体を動かせたこと

「最初に噛み付いたのは、衝動的だった、と言つたわね?」

「え、ええ……」

「なるほど……」

藤原さんは、一人納得したように頷く。

「なんかわかつたのか?」

「……確信は持てないけど、麻由さんに入り込んだ化け物は吸血鬼
の可能性が高いんじゃないから」

「……」

「吸血鬼……」

そういうえば、首筋に噛み付くなんて吸血鬼以外に思いつかない。なぜ気づかなかつたのだろう。

考えてみればすぐにわかることなの!」

「ただ可能性が高いだけよ。でも、吸血鬼対策はしておるべきでしょうね」

「そうだな……」

「あと……想いを叶えてやる、といつのは?」

藤原さんが麻由に問う。

「え、えっと……それは……」

麻由は俺の顔をちらりと見ると、うつむいてしまつた。

「…………ところで」

藤原さんが急にこちらに顔を向けた。

「せつからく人が親切にも家までついてきてまで相談に乗つてあげるつていうのに、客にお茶も出せないのかしら?」

「そういうえばそうだつたね。悪い、今淹れてくるよ」

「ちゃんとした茶葉を使って、抽出時間は間違えないでね」

「ちょっと待つた、うちにはティーバッグくらいしかないぞ」

「ならば買つてくれればいい話でしょう?」

「何なんだ、一体。

しかし、ここで彼女の機嫌を損ねて協力してもらえなくなつたりしたら、本当に打つ手がなくなる。

「…………わかつた。ちょっと買つてくるよ」

なんとなく理不尽さを感じながら、買い物に出かけることにした。

ばたん

部屋のドアが閉まり、足音が遠ざかって聞こえなくなつた。

少し強引過ぎたけど、彼を追い出すにはこうするほか仕方がない。

「さてと、麻由さん……」

早速本題に入ることにする。

「さつきの、想いを叶えてやる、つていう話だけば、どうこういふ」とか、教えてもらえないかしら」

「……」

だんまりだ。

しかし、それは私の推測を確信に変えるだけの意味を持つている。これは、私が切り出すしかない。

本人には、とても言い出しづらいことだらうから……

「……あなたの「想い」とは、兄に対する恋心のこと、ね？」

「……」

彼女は黙つたまま、スカートの裾をぎゅっと握り締めた。

カチカチという秒針の音が、やけに耳に付く。

それが60を数えようかという頃。

「どうして……わかつたんですか？」

彼女は搾り出すよつに言つた。

「この話を出したとき、あなたは彼の顔をちらりと見ていつむいた。それを見れば、一目瞭然じやない」

「……」

彼女は何を思つているのだろうか。

私に対する怒り？

すぐにはボロを出した自分への恨み？

重荷となつていていた想いを他人に知つてもいいことで得られた、気分の樂さ？

「……お兄ちゃんには、黙つていってもらいますか？」

「ええ、もちろん。伝えるとしたら、それはあなたがするべき」とだから

「……私、この想いを伝えるつもりはありません

彼女は、意志のこもつた目で私を見た。

「……でも、あのとき、想いが叶うつて言われて、心が揺らいだんです

「そんなことを言われれば、誰でも揺らぐものだと思つた。でも……」

…

一呼吸置いて、私は続ける。

「でも、そいつが叶える想いは、あなたの望む形ではないと思つわ
「どうこうこと……ですか？」

「想いを叶えると言つて取つた行動が噛み付く」と。その意味を考えればすぐわかるわ」

「その、意味？」

「吸血鬼に噛まれた人間は、吸血鬼の意のままに操れる下僕になる。
それを利用すれば、恋人の真似事くらいできるかもね」

「……」

「でも、いくら下僕でも、心までは奪えない。真似事はできても、
本当の恋人にはなれないわ」

「つまり……そいつが叶えたら、両想いにはなれないとこと、で
すか？」

「そう……」

「でも、なんでわざわざそんなことを言つたんでしょう？」

「あなたの体を完全に乗っ取るため、でしょうね」

「え……」

「想いを叶える、というアメを与えることであなたに敵意を失わせ、
心を呑み込むつもりだったんですね」

「……」

「とにかく、心を呑まrebてはダメ。そいつは、絶対にあなたの敵だ
つてこと、心に刻んでおいて」

「……わかりました」

がちゃ

「ただいまー」

少し離れたところから、ドアの音と彼の声が聞こえてきた。

「それじゃ、今日はもうお暇するわね。いい方法が見つかったらす
ぐに来るから」

「ありがとうございます」

彼女は頭を下げる。

「……好きでやつてることだから、気にしないで」

ばたん

私は、彼女の部屋をあとにした。

キツチンに顔を出す。

「私、もう帰るから、お構いなく」

「え、もう？」

お湯を沸かしていた彼が振り向いた。

「……何か、わかつたか？」

「ええ、少しば」

「解決、できそつか？」

「それはわからないわ

「そつか」

「……」

「……」

会話が途切れる。

「……いい方法が見つかったらすぐに来るから。それじゃ」

麻由さんに言つたのと同じ台詞を言つて、私は河口家を出た。家を出てから、一度だけ振り返る。

二階のあの部屋。

つい数分前、私はあそこでものすごい話を聞いた。

「魔物に憑かれた、なんてね」

そういうえば、そんな内容の本を持つていたな……

帰つたらすぐに読み返してみよう。

あと、念のため、素人でも使える攻撃用の魔術もいくつか調べておくべきかも。

「吸血鬼に効くくらい強力で、しかもマスターするのが簡単なものがいい」

今日は久しぶりに徹夜の勢いになるかしら。

ね

なんだかわくわくしてしまったのをなんとか抑えながら、帰路についた。

第四話 吸血鬼（前書き）

この章に出てくる呪文は、プレイステーションゲーム、ファイナルファンタジータクトエクスに出てくる呪文を一部参考にしました。

第四話 吸血鬼

「ちょっといい？」

藤原さんに相談した翌日、登校直後に話しかけられた。

「これを見て」

そう言って、藤原さんは本を開いた。

「なになに……魔物憑依について！？」

「ええ、この記事に対処法が載ってるわ」

「ありがとう！じゃあ早速試して……」

「待つて」

藤原さんが、本を持つて麻由のところへ行こうとした俺を止めた。

「いい？相手はただの魔物じゃないの。人間に憑依し、その体を意のままに操ることのできる魔物よ

……俺にとっては「ただの魔物」ってものがよくわからないが。

「……つまり、かなり強力な魔物、ってことかな？」

「そう」

藤原さんは短い言葉で肯定した。

「この記事の通りにすれば魔物を倒せる。でも、かなりの危険を伴うことになるわ」

「そんなの構わないっ！」

今、こうしている間にも、麻由に危険が迫っているかも知れないのだ。

何もしないでなんていられない。

「……危険なのは私たちだけじゃない。麻由さんも、なのよ」

「どうということ？」

「まず、憑依を解くとき。精神が半分繋がっているようなものだから、無理をすれば麻由さんの人格が壊れてしまう可能性があるわ。

次に、憑依を解いたあと。離れてしまえば、あとはケンカと一緒に相手の命を狙いあうことになる。

憑依が解かれたとき、一番近い位置にいる麻由さんが真っ先に狙われることになるでしょうね

命を狙いあうって……

かなり物騒な話になりそうだ。

何にせよ、方法が見つかったからといって、楽観視できる状況じゃないってことか。

「……どうすればいいんだ？」

「まず、憑依解除の儀式を失敗しないこと。第一の危険はそれだけで回避できるわ」

「なるほど。手順通りやれば問題ないわけだな？」

「そうね。でも簡単なことじゃないから気をつけて。次に、第一の危険だけど、これは避けようがないわ」

「じゃ、じゃあ、どうするんだ!? 相手は何してくるかわからないんだろ!?」

「落ち着いて。憑依を解除してすぐに攻撃を仕掛ける。麻由さんの安全が確保できるまで、相手を防御に徹させるの。

単純な作戦だけど、これがおそらく最も有効だわ」

「なるほど……じゃあ武器が必要だな。金属バットでも借りるか」

「吸血鬼に、武器での攻撃は効かないわよ。もちろん素手でも」

「なっ!? そ、そんなの、打つ手なしじゃんかっ！」

武器で攻撃できないなんて、攻撃のしようがないじゃないか。

「これ、見て」

そう言つて彼女は、「強力な攻撃魔術百科」という名前の本を開いた。

いかにもって感じのタイトルだ。

「呪文よ」

彼女が開いたページには、文章と呪文の名前、イラストまで載っていた。

一人が手の平をもう一人に向けるように開き、その手の平からもう一人に向かつて青い閃光のようなものが描かれている。

これがこの呪文の効果なのだろうか。

「この呪文、覚えて」

「……は？」

「**！」**の呪文を覚えるの。すぐに撃てるように練習して「冗談を言っているのかとも思つたが、彼女の顔に冗談めいたところはまったくない。

「……でも、俺みたいな一般人が、すぐに使えるのか？」「これを持つていれば大丈夫」

ビー玉大の綺麗な琥珀色の石を渡される。

「なんかこれ、あの石に似てるな」

「魔力が込められている、という点では同じかもね。ただ、向こうは魔力は魔力でも、魔物のものだつたみたいだけど」

「……どういうこと？」

「この石には魔力が込められているの。呪文の発動に役立つわ」「ふーん、これが……」

覗き込むと、藤原さんの顔がさかさまに映っていた。

「昼休みまでには呪文を暗唱しておくこと」

昼休み、俺はピンチに立たされていた。

「ほら、早くやりなさい」

藤原さんがじれったそうに言う。

ここは、中庭のど真ん中。

見渡す限り、20人ほどの人が**昼**はんを食べたりおしゃべりしたりしている。

「**！」**こんなところで……？」

「当然でしょ、ほら」

こんなところで呪文なんか詠唱したら、変人確定だ。
しかも、何も起こらなかつたりしたらかなりイイタイ人だ。

いや、あのイラストみたいなのが手から出てきてもちよつと困るんだが。

「麻由さんを助けたいんでしょう…？早くやりなさいよ…」

……そうだった。

俺は麻由を助けるためには、手段を選ばないと決めたはずだ。
だからこそ、クラスどころか学年中から浮いた存在である藤原さんに協力を頼んだのだから。

……覚悟を決めよう。

妹を助けられないと、学校で変人扱いされると、匕首がまさか。
そんなこと、考えるまでもない。

左手で琥珀色の石を握り締め、右手をターゲットの植木に向け、叫んだ。

「暗雲に迷える天空の光よ、一条に集いて神鳴る裁きとなれ！」

詠唱を始めた瞬間、左手の石から大きな力が流れ込んでくるような感覚。

それが体中を駆け抜け、右手へ集まり、詠唱が終わった途端しーん

何も起こらなかつた。

……終わった。

中庭中の視線が集まっているのを感じる。

恥ずかしくて振り返ることができない。

何もできず、ターゲットの植木を睨み続ける。

嗚呼、俺の平穏な日々よ、さよなら。

時間の流れがとても遅く感じる。

みんな、早く興味を失えばいいのに。

実際には大した時間ではないかも知れないが、俺には永遠のようにさえ感じられた。

「……ええつと」

沈黙に耐えかね、藤原さんに視線を向いた。

「……どうして、失敗したのかしら」

彼女は考え込んでいた。

「あの、藤原さん？」

「詠唱のとき、魔力が集まるのを感じた？」

「あ、ああ、魔力かどうかはわからないけど、なんか大きな力がこの石から流れ込んでくるような感じがした」「それが魔力よ。その力はどうなった？」

「ええと……右手に集まつていったな」「詠唱が終わつたとき、開放されなかつたの？」

「うーん……」

さつきの様子をよく思い出してみる。

「なんか、開放されたつていうより、消えてつた感じかなあ」「……消えた、ですつて？」

再び考え込む藤原さん。

しばらくして、彼女は顔を上げた。

「失敗した原因はわからないわ。でも、時間がないことも確か。少し不安はあるでしょうけど、感覚は掴んだみたいだし、このまま行きましょう」「え？ええつ！？」

とんでもないことを言われた。

それってぶつけ本番ってことか？

「この本の1-16ページと373ページ、それから385ページの呪文を、今すぐ覚えて。何かの役に立つかもしれないから」「わ、わかった」

もう、半ばヤケだ。

「覚えたらすぐに麻由さんのところへいくわよ

「あ、あの、本当にこんなこと、するんですか？」

「麻由が戸惑つたような声で囁つ。

改めて本の内容を読み返してみる。

憑依解除の対象となる者は、まず逆立ちし、全力疾走したのち、右に三回回つて「わん」と言い、左に一回回つて「にやあ」と

言つ。

……奇抜だ。

あまりにも奇抜だ。

誰だって、こんなことをしる、と言われたら、惑うに違いない。
さらに、奇行を行わなければならないのは麻由だけではない。

憑依解除を行う者は、次のような動作を繰り返しながら、憑依解除の対象に向かつて念を送り続ける。

1・両手を天に向かつて伸ばし、雄叫びをあげながらゆつくりと開いていく。

2・両手が肩の真横まできたら、叫ぶのをやめ、心を静かにし、両手をゆつくりと胸の前で合わせる。

3・合わせた両手の中にエナジーが満たされるのを感じたら、憑依解除の対象に掌を向け、エナジーを送る。

……念だの、雄叫びだの、エナジーだの、突つ込みたいところは多々あるが、この際無視。

家の中に全力疾走できるスペースはないので、外でやるしかない。どう考へても変人の集会だ。

しかし、やらないわけにはいかない。

俺たちは覚悟を決め、自宅近くの公園に行くことにした。公園と言つても子供が遊ぶような遊具があるわけではなく、広場や散歩道が主体の自然公園だ。

この時間は人が少ないようで、誰もいない広場が比較的簡単に見つかった。

「わん」と「にゃあ」はタイミングがシビアらしく、藤原さんは麻由のそばでタイミングを指示することになった。

「大切なことは、信じること。絶対に成功すると思つていなければ、失敗するわよ」

藤原さんの忠告に、静かに頷く俺と麻由。

「よし。じゃあやるか！」

「うんっ」

氣合を入れ、儀式に入る。

麻由が逆立ちをし、俺は少し離れたところで両手を天に向かって伸ばして、「うおおおおっ」と雄叫びをあげる。

麻由に向かつて念を送り続ける。

麻由が逆立ちをやめ、全力疾走に入ろうとした、その瞬間

「きやああっ」

麻由が、藤原さんに襲い掛かった。

まずいつ！

吸血鬼が表面に出てきたのか！？

藤原さんは押し倒され、麻由の体がその上に覆いかぶさる。

「藤原さんっ！ 麻由っ！」

慌てて駆け寄り、引き離そうとする。

が、ものすごい力で振り払われ、尻餅をついてしまった。

「きやあああああっ」

再び、藤原さんの悲鳴が上がる。

「くそっ」

すぐに立ち上がり、今度こそ引き離した。

血のよじに、真っ赤な瞳の麻由。

首筋から、わずかに血を流す藤原さん。

血を……吸っていたのだろうか。

「うわっ」

麻由のパンチをすれすれのところでかわした。

どかつ

「ぐつ」

そのまま直後に、麻由の蹴りが横つ腹に入った。

息が詰まる。

胃の中身が逆流しそうだ。

連續で繰り出された蹴りをかわし、距離を取る。

「倒されそうで出てきたのかよ……」

この状況はまずい。

とにかく、一度藤原さんを安全なところに避難させよう。
そう思つて振り返つた瞬間。

「があつ

」

側頭部に衝撃が走り、視界が揺れた。
世界がぐらぐらと揺れているようだ。
立つていいことができず、思わず膝をついた。

目の前に立っていたのは、藤原さん。
無感情な表情で、俺を見下ろしている。

彼女が……蹴つたのか？

「な……一体どうしたんだよつー？」

彼女は答えず、パンチを繰り出した。

「くつ

それをかわし、藤原さんとも距離を取る。

状況が理解できない。

「血を吸われると奴隸になる、とか？」

そうだ。

吸血鬼に血を吸われた者は、その奴隸になってしまつ、といふ話があつたよつな気がする。

「最悪だ……」

2対1、しかも、相手を傷つけることはできない。

絶体絶命のピンチの中、嗜虐的に口の端を上げる麻由と、無表情な藤原さんに、背筋を冷たいものが伝つた。

第五話 河口真

「はあつ……、はあつ……」

二人の攻撃をかわしながら、頭をフル回転させる。
なんとかこの状況を打開しなくてはいけない。

「はあつ……、くつ！」

がくんと膝が崩れた。

もう体力が限界だ。

今の俺にできることをもう一度考えてみる。

覚えた呪文が全部で4つ。

魔物の憑依を解く儀式。

あとは……運動神経が並以上はある、ということだけだ。この中から、今有効なのは？

一つずつ検証してみる。

儀式については麻由や藤原さんが正氣を失っている今、役には立たないだろう。

体力も限界なので、運動神経も人並以下になつてている。

ならば呪文か？

4つの呪文は、いづれも一度たりとも成功させたことはない。
雷を発生させ、ダメージを与える呪文。

即座に眠りへ落とす呪文。

誰かの精神世界へと侵入する呪文。

実体のない幻影を出現させる呪文。

この中で、有効なのは……

瞬間、ある作戦がひらめいた。

「成功するか、わからないけどな
でも、成功する。
させてみせる。

しなければ、麻由も、藤原さんも、助けられないから。

今までにないほどのエネルギーが石から左手へ、左手から全身へと流れしていく。

俺は本に書かれていた呪文を思い出し、詠唱を始めた。

「我が言霊に意識薄れ、無の暗闇に沈め……深き静寂にその身を委ねよ！」

麻由へと向けた右手から、大きなエネルギーの奔流が流れ出す。麻由の体がぐらりと揺れ、その場に倒れこんだ。

「……成功、したのか？」

麻由に駆け寄る。

「……………」

規則正しい寝息。

どうやら本当に成功したらしい。

「……………あれ？…………私…………」

「藤原さん！？」

後ろを振り向くと、藤原さんがきょときょとしている。

正気を取り戻したようだ。

なんとか、危機的状況は脱したようだった。

「ごめんなさい、油断していたわ」

「いや、いいんだ。それより…………」

とうえず藤原さんに状況を話した。

「…………おそらく、麻由さんが目を覚ましたら私はまた正気を失うでしょうね」

「俺一人じゃどうにもできないぞ…………」

「麻由さんの精神世界に侵入すればいいわ」

しつと黙つてのけた。

「もともと、こういう可能性を考えて覚えてもらつた呪文だから

「具体的には？」

「眠つた状態の麻由さんの精神世界に侵入するの。そのどこかには吸血鬼がいるはず。そいつを倒す」

「眠つた状態の麻由さんの精神世界に侵入するの。そのどこかには吸血鬼がいるはず。そいつを倒す」

憑依を解くことなく、直接攻撃を仕掛けるということのようだ。

「麻由さんには少なからず危険が伴うわ。できればこの方法は使いたくなかった」

「でも、今はそれしかないんだろう？ならやるしかないじゃないか」

「ええ、そうね。ただ、覚えておいて。戦場になるのは、麻由さんの精神。あまり無茶をすると、麻由さんの心は壊れ、廃人になるわ」

廃人。

藤原さんがさらつと口にしたその言葉は、とても重い意味を持つたものだった。

「……大丈夫だ」

自分に言い聞かせるように呟つ。

「では、いくわよ」

藤原さんの手が、眠っている麻由の額に乗せられる。

俺も手を重ねた。

そして一人で詠唱に入る。

「精神を司る精靈よ、我をこの者の無意識へといざなえ」

詠唱を終えると、周りの景色が見えなくなり、どこまでも落ちていくような感覚が襲ってきた。

「う……」

目を開けると、見慣れた天井が見えた。

体を起こすと、どうやら自室のベッドの上のようだ。

「お兄ちやーん、起きてるー？」

麻由の声がする。

がちゃ

返事がないのを不審に思ったのか、麻由が入ってきた。

「起きてるんなら、ちゃんと返事してよねー」

麻由は呆れた風に言うと、そのまま出て行った。

俺は何をしていたんだっけ？

……そうだ。

確かに、魔物に憑かれた麻由を助けるために麻由の精神世界に入り込んだんじやなかつたか？

じゃあ、ここが麻由の精神世界？

あまりにも日常的な光景に、軽く混乱する。

今までの魔物騒動は、すべて夢だつたのだろうか。

そう考へたほうが納得がいく。

とりあえずリビングに向かつた。

「おはよー、お兄ちゃん」

「おはよー」

「紅茶淹れるけど、飲む？」

「ああ、もううつよ」

いつもとなんら変わらない。

変わらな過ぎて氣味が悪い。

「紅茶にはやつぱこれだよねー」

そう言つて麻由ははちみつを取り出す。

それをスプーンですくつてカップにたらす。

同じ動作を3回繰り返し、かき混ぜる。

「お兄ちゃん、なんで私服なの？学校に行くんだから、制服でしょ？」

かき混ぜながら麻由が言つ。

言われて気づいた。

俺の服は、麻由の精神世界に入るときに着ていた服だ。

魔物騒動は本当だつた？

もう、何が正しいのかわからなくなってきた。

「うーん、そうだな」

適当に相槌を打ちながら、麻由に対してもどこか違和感を覚えていた。平日の朝でも、時間に余裕のあるときはいつしても優雅なティータイムとなることがある。

そういうとき、多くの場合麻由ははちみつを紅茶に入れる。どこも不自然なところはないのに、どこかおかしい。

違和感を拭い去れぬまま、俺は麻由と一緒に登校した。

登校中、終始麻由は俺にべたべたしてきた。

手をつけないだり、腕を組んだりと、知らない人が見たらバカップルに見えただろう。

俺は俺であり強くは言えず、周囲の視線が痛かった。

教室に入り、席に着くと藤原さんが話しかけてきた。

「どう?」

「どうして、何が?」

藤原さんが話しかけてくる「こ」とは、魔物騒動は夢じゃなかつたということだ。

少し残念な気持ちになった。

「こ」は麻由さんの中。当然、ヤシモ「こ」の世界のビリかにいるはず。居場所の見当はついた?」

「いや、さっぱりだ」

「そう……」

つこわしきまで、現実世界との区別もついていなかつたのだから当然だ。

「この中では、ヤシは何でもできるわ。だから、誰かに扮していると思うの」

「誰かに、か……」

真っ先に麻由の顔が浮かぶ。

藤原さんもそうだったのではないか。

それでも「誰かに」と言ったのは、確証がないからか、俺に気を使つたのか。

「そついえば麻由のやつ、朝からなんか変だつたな」

「…………」

「麻由に扮してるんじゃない?」

「…………確証はある?」

「いや、ないけど。とりあえず、試してみれば……」

「そんな生易しいものじゃないの」

俺の言葉を切つて藤原さんが言つ。

口調こそいつもどおり静かだったが、その言葉には強さがあった。
「この世界での麻由さんは、麻由さんの精神そのものの。それに傷をつければ、麻由さんは心に傷を負う。もし死ぬようなことがあつたら……」

恐ろしかつた。

その先は聞きたくなかった。

耳を塞いでしまえれば、どんなに楽だつただろう。

「……廃人になるわ」

精神が死に、肉体だけが生き続ける抜け殻。

麻由をそんなものにはさせられない。

俺は自分の考えの甘さを思い知つた。

「100%ニセモノだ、という確証が必要なわけか……」

「ニセモノがいるということは、麻由の格好をした人間が一人いると
いうことだ。」

「二人がどこにいるか、まずは探さないとな」

「もう一人なら私服で公園を散歩してたけど、どうするの?」

「二人を集めて、麻由にしかわからない質問をする、とかは?」

「麻由さんとヤツは半分繋がっているのよ?リアルタイムで思考を読み取られたら意味がないわ」

「じゃあ、麻由しか持つてないものを出させる、ってのは?」

「精神世界内では、物はイメージするだけで手に入るわ。一人とも同じものを取り出せるでしょうね」

ほかに方法が思いつかない。

打つ手なし、なのか?

どうすればいいんだ……?

「……無意識の行動を見る、というのはどうかしら?」

藤原さんが思いついたように言つ。

その瞬間、朝の麻由が脳裏を過ぎた。

そういうえば、紅茶にははちみつをスプーンに2杯とちょっと、といふこだわりを持つ麻由が、今朝に限って3杯入れていた。

「そうか、それだつ！」

「きやつ！」

思わず掴みかかつてしまつた。

「朝の違和感はそれだつたんだ！制服を着た麻由が一セモノだ！」

「やつと捕まえたぞ、麻由。……いや、吸血鬼」

「え……？ ちょ、ちょっと、お兄ちゃん、なに言つてゐるの……？」

外見では本物の麻由と見分けがつかない。

もし、間違ついたら……

緊張で手が震える。

左手で石を握り締めて震えを止め、右手を吸血鬼へ向ける。

「か、覚悟しやがれ！」

「待つてよ、お兄ちゃん！ なんか怖いよ……」

「う……」

この麻由は本当に一セモノなのか？

判断を間違つてはいいのか？

そもそも、なぜ一セモノが家にいて、俺を起こした？

一セモノが学校に来るだろうか？

もう、何を信じればいいのかわからない。

決心が揺らぐ。

このまま、目の前の麻由に呪文を撃つていいのか？

……だめだ、自信がない。

間違えば麻由は廃人になる。

危険な賭けはできない。

俺は、右手を下ろした。

「よかつた……お兄ちゃん、私を信じてくれたんだね」

麻由が笑顔になり、俺に駆け寄ろうとする。

「待つて、麻由さん」

藤原さんが冷たい声でそれを制した。

「私たち、付き合つことになったの」

「え……」

麻由の顔が一瞬で曇る。

「な、なに言つてゐんですか、藤原さん？」

「何つて、ただの事實を言つただけよ」

そういうながら、藤原さんが俺に抱きついてくる。

「ちよ、ちよっと、藤原さん……」

突然のことに俺は何がなんだかわからず、そういうのが精一杯だった。

藤原さんは俺の頬に手を当てるとい、自分のまつを向かせ、キスしようとする。

「だ、ダメ――――――！」

麻由が叫んだ。

「あら、どうして？ 兄が誰と付き合つが、妹には関係のないことでしょう？」

藤原さんは冷ややかに言い放った。

「だつて、お兄ちゃんは……私は……！」

麻由は俯いていたが、不意に顔を上げた。

「私は、お兄ちゃんのことが好きだから！」

……混乱していた。

何もわからなかつた。

ずっと好きだつた女の子から告白されたのだ。

幼い頃の初恋。

その気持ちを伝えられぬまま、その子は俺の妹になつて。

永遠に隠してこいつと思つていた気持ちが、抑えられなくなつた。

だつた。

「麻……」

「河口君、この麻由さんは一セモノよ

藤原さんの言葉で、俺は我に返った。

「ど、どひしてニセモノだと……？」

「説明はあと。今はこいつを！」

「くつ……」

俺は再び下ろしていた右手を吸血鬼に向ける。
そして、詠唱を開始した。

「暗雲に迷える天空の光よ、一條に集いて神鳴る裁きとなれ！
右手から大きなエネルギーの波が放出されるような感覚。
青白い閃光が麻由の体へ向かつて伸びる。

ガーン！

轟音とともに、麻由の体が吹っ飛ぶ。

吹っ飛ばされた麻由の体は、いつの間にか黒い霧のようなものにな
つていて。

タバコの煙が霧散するように、見えなくなつた。

「う……」

麻由がベッドの上で身じろぎする。

「目が覚めたのか、麻由？」

「……お兄ちゃん？」

麻由は薄つすらと目を開いた。

「あれ……？ 私、何してたんだつけ？」

「どうやら少し混乱しているようだ。

「ああ、公園で魔物と戦ってきたんだ。疲れてたみたいだから、そ
のまま部屋まで運んできたんだ」

俺は、あつたことを麻由に話した。
告白のことは伏せておいたが。

「そつか」

麻由は安心したように呟いた。

「……少し元気にしてやろう。

俺は、口の中で呪文を呴いた。

「悪戯好きの妖精よ、我が望むものの影のみを光の下に現せ」

プリンの幻影を作ることに成功した。

「ほーり、麻由、大好きなプリンだぞ」

そう言って、幻影を差し出す。

「わあー、ありがとう、お兄ちゃん」

何も知らない麻由は、それを受け取ろうとするが、

「あ、あれ？」

実体のない幻なので、受け取れるはずがない。

「わははは、それは呪文で作り出した幻だ！」

自慢してみる。

麻由は一瞬ぽかんとしたが、すぐにからかわれたことがわかつたらしい。

「ー、こらー！」

途端に元気になつた麻由から逃げる。

麻由さんの本当の気持ち、知りたい？

藤原さんの言葉を思い出す。

だけど、俺にはそんなの必要ない。

麻由のことがずっと好きで、恋人になりたいと思つひととも一度や一度ではなかつたけど。

俺は、麻由の兄として見守つていくと決めたから。これから先、何があつても。

麻由の一番近くで、麻由のことを見つけていく。振り返ると、麻由は楽しそうに笑つていて。

願わくは、この笑顔が絶やされることがないよつ。

第五話 河口真（後書き）

最後までお読みください、ありがとうございました。拙い作品ではあります、お楽しみいただけたなら幸いです。評価や感想もお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8728c/>

闇の石

2010年12月4日05時50分発行